

《《》》  
人道より政治が常に優先

「二十一世紀は中国の世紀」「中国は世界の工場」といった薔薇色の中国像がこのところあちこちで描かれていたけれど、中国広東省を発生源にする新型肺炎(重症急性呼吸器症候群(SARS))のこの春以来の猛威は、その発生と初期対応の失態、事実の隠蔽とそれへの杜撰な対応という実態を通じて、中国社会の実際的な有様を全世界に晒すこととなった。「二十一世紀は中国が問題」「中国は世界の病床」といったかたちで、いま国際社会は中国を疑い、見張っている。

その中国の最高責任者になったはずの胡錦濤・国家主席は、過般のエビアン・サミットに出席して国際的なデビューを果たしながら、SARSの発生で近隣の諸国・諸地域のみならず全世界に多大な被害と不安をもたらしたことを謝罪すべき重要な機会であったのに、ついにそのような行為も言葉もなかった。まことに残念である。のみならず中国当局は、SARSに汚染さ

れて深刻な被害に遭っている台湾がWHO(世界保健機関)にオプザーバー出席することさえ認めず、政治を人道の上に置く姿勢を依然として崩していない。

今回のSARS騒動で中国

# SARSが映し出す中国社会の実像

の体質と実像が明白になった、その問題点は以下の三点に集約できよう。まず第一は、中国社会の閉鎖性と非透明性が明らかになったことである。その最大の原因は共産党一党独裁の軍事国家体制にあるのだが、去る四月二十日に張文康・衛生部長と孟学農・北京市長が更迭され、同時にそれまで隠蔽されていた感染情報が公開されるようになるまで、中国当局は事態を隠していた。すでに本年二月初旬の段階で香港のメディアなどが警告し、「ウォールストリート・ジャーナル」三月三十一日の社説「中国を隔離せよ」も中国当局の対応を強く批判していたのに、中国側は聞く耳をもたず、「人民日

報」などは「デマ」であり「悪意の扇動」だとして逆に反論していた。この間にSARSは大陸中国のみならず香港、台湾、シンガポールさらにはベトナムやカナダの華人

ることは間もなく判明した。SARSのような医療問題でも虚偽を公言する中国の経済指標そのものの信頼性に疑義を呈した専門家の論文としては、「チャイナ・ビジネス・レビュー」(二〇〇二年九

価指数もマイナス一・三%、都市の雇用の伸びはわずか〇・八%であることなどを同じ中国側の公式統計を使って分析し、中国社会の特質として、末端の郷・鎮の幹部が生産実績を競うために、偽りの

## 正論



国際社会学者  
中嶋 嶺雄

ったのである。

《《》》  
信憑性に欠ける発表数字

第二は、中国が発表する統計やデータの信憑性が改めて問われたことである。中国当局者はこの間、たとえば四月三日の張文康・衛生部長発言をはじめ、「伝染病を完全に制圧した」として数字も挙げていたのだが、それが偽りであ

月十二日号)に載ったピッツバーグ大学のトーマス・G・ロウスキー教授の「中国のGDP統計に何が起きているか?」が印象深い。同教授は一九九八年から二〇〇一年までの四年間の中国の経済成長率(GDPペース)は年間七・七%、累積で三四・五%なのに、エネルギーの消費量はマイナス五・五%、消費者物

誇大報告をする風潮(假報浮夸風)にも言及していた。一九五〇年代後半の「大躍進」政策の時代と基本的に変わらぬ中国社会の体質なのだ。今回のSARS問題でも同様の体質が明らかになった。胡錦濤・温家宝体制の新指導部がいかに「硝煙なき戦争」だとして奮闘していても、それだけで中国社会の体質が変

## 変わらぬ国の閉鎖性と隠蔽体質

わるとは思われない。情報公開に対する中国共産党内部の抵抗も大きいようで、インターネットへの規制ばかりか、中国指導部のなかでも江沢民・曾慶紅系統の指導者の多くは、この間、北京を離れて上海に逃れていた。

《《》》  
国際的な信頼性も損なう

第三は、中国当局者への信頼性が大きく損なわれたことである。この問題はきわめて重大で、国際的な信頼性も損なわれたばかりか、中国のイメージも大きく傷ついた。改革・開放政策の基盤となった外国資本は新規投入を差し控えるばかりか、中国からの撤退もあり得よう。そして、SARSの感染情報さえ明白にし得なかった中国の統治システムへの中国民衆の不満がさらに膨らむかもしれない。

今回のSARSの蔓延が人権や民主を一貫して抑圧してきた中国共産党独裁体制への天罰としたら、今回の一連の事態は、このような体制の末世を示唆しているように私には思われてならない。

(なかしま みねお)